

地域・読者



田植えには普段農作業をするのない僧侶たちも参加。田んぼの心地よいぬかるみを楽しみながら、1本ずつ手分けしたい」と語る。

食べる人の自立を願い「一本立ち」と名付けられた米は、地元の社会福祉協議会や本願寺派が運営する福祉施設などに寄付され、困窮者やハンディキャップのある人々に届けられる。田植えを主導する真出智真・光西寺住職(60)は「食べて心を満たすことを通して『口から入る仏教』を広めたい」と語る。

涼しい風が木々を揺りす長野県高山村の初夏の水田で、浄土真宗本願寺派の僧侶やボランティアたちが熱心に稻を植えていた。

「口から入る仏教」伝道

キラリ
頑張る
宗教者

苗を丁寧に植えていた。近年、長野県内では米農家を中心廃業する農家が増えている。高山村

稻作を通じ社会に貢献

でも借り手がつかず、耕作放棄地となる水田が後を絶たない。真出住職はこうした荒れ地を引き受け、重機を駆使しながら自らの手で開墾をしてきた。

開いた農地は、全国の人々との交流の拠点でもある。6月には首都圏に住む家族連れを招き、共に田植えを行った。過去には障がい者を招待して村内でリング狩り体験を実施したこと。「社会貢献の場づくりが寺の使命だと思っている。農業を通じて社会貢献し、寺を知つてもりたい」と

共に田植えをした親子連れと記念撮影(左)
興じる真出住職(左)

「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるが、仏教を知るためにもまずはおなかをしつかり満たすことが大事。そのため汗を流し、困っている人の心とおなかを満たしたい」と話した。

(石邊次郎)

光西寺には門徒がほとんどおらず、葬儀や法要による収入はごくわずか。農業や交流事業に必要な資金は住職自らがアルバイトで稼いだ給料で賄つており、60歳を迎えた今でもスキーのインストラクターや塗装業の仕事を続けている。元々、規模の小さい寺を継ぐ気はなかった。住職だった祖父の「光西寺は何にもないなあ」という言葉が忘れられなかつた。祖父は本願寺の職員を振り返り思わず漏らしたという。